

ドイツ留学を通じて考える心地よい生き方

橋本，明佳
九州大学大学院経済学府：修士課程1年

<https://doi.org/10.15017/7360343>

出版情報：ポリモルフィア．4, pp.87-93, 2019-03-15. 九州大学男女共同参画推進室
バージョン：
権利関係：



活動報告

ドイツ留学を通じて考える心地よい生き方

橋本明佳 九州大学大学院経済学府 修士課程 1 年

1. はじめに

私は2017年8月から2018年2月までの7ヶ月間、ドイツのミュンヘンへ留学した。本留学は、文部科学省が展開する官民協働の留学促進プログラムである「トビタテ！留学JAPAN¹ 日本代表プログラム・世界トップレベル大学等コース」に、自ら立てた計画書とプレゼンテーションをもって選拔され、実現したものである。私は、インターンシップと交換留学を組み合わせ、「アントレプレナーシップを持つグローバルな会計の専門家」になるという将来の目標に向けて、国際会計、アントレプレナーシップおよびグローバルセンスの3要素を伸ばすことを目的として計画を立てた。具体的には、インターンシップでは、8月から9月までの2ヶ月間財務税務コンサルティング企業のミュンヘンオフィス立ち上げにフルタイムで携わり、実学である会計の研究に生きる経験を積むとともに、海外での働き方を経験した。さらに、インターンシップ期間は大学の夏季休暇中であったため、現地の家庭にホームステイしてお世話になった。また交換留学は10月から2018年2月まで、アントレプレナー教育を全学的に押し出しているミュンヘン工科大学（Technische Universität München: TUM）² で行い、ドイツ語の授業だけでなく、英語で開講された財務会計、経営学にお

ける実証研究の手法およびアントレプレナーシップの授業を履修した。

日本で語られるドイツは、働き方改革の議論で最近引き合いに出されるように、働きやすい国との印象が強いのではないだろうか。確かに、敗戦国で、勤勉に働く人が多く、日本人と国民性が近いと評され、自動車産業を中心とする製造業が盛んであるという共通点を持ち、GDPベースの経済規模も近い³という側面はある一方、個人主義⁴と多様性という観点では大きな違いがあるように思われる。慣れない文化・言語環境内におけるミュンヘン生活は、決して容易ではなかったが、毎日を生きているという実感が得られ、心地よいものであった。

本稿では、私が感じたドイツの特徴とその理由、またそのようなドイツで出会ったロールモデルを通じて思い描く自分自身の将来像を綴りたい。

2. 働き方

ドイツ人の仕事における効率性の高さは広く知られており、ドイツ人は日本人に比べてかなりの短時間労働である⁵。仕事においては、各個人の分担が明確に決まっており、自分の割り当てを守れば、仕事の仕方に対しては、各個人にある程度の裁量が与えられている。例えば、週40時間と

いう労働時間が決まっている場合、月曜日から木曜日に1～2時間ずつ長く働いていれば、金曜日に40時間に達した時点で早上がりすることも可能である。実際に、インターン先の入居していたシェアオフィスでも金曜の午後には閑散とした状態であった。このように早々に仕事を切り上げて何をするかといえば、自由で充実したプライベートな時間を過ごすのである。金曜日であれば週末にかけて隣国へ旅行するためにスーツケース持参で出勤する人をよく見かけ、天気が良い平日の夕方であれば、職住近接であるため、仕事終わりに簡単な夕食⁶を携えてピクニックに出かけることすらある。また、職種にもよるであろうが、仕事中に効率が上がるのであれば、イヤホンをして音楽を聴くといったことも可能である。こうした自由裁量が認められている分、仕事の成果は報酬や待遇とシビアに結びついている。特に、就職してから最大6ヶ月間の試用期間（Probezeit）に、理由なく解雇されることも大いにあり得るため気が抜けない。また、必要に応じて残業もあり得るが、一般に残業をするということは、時間内に仕事を終わらせていないということを意味し、本人のマイナス評価につながる。また部下が有給を消化していない場合には上司の責任となるため、一年の予定を決める際には、どこで休暇を取るかを調整するところから始まるとも言われるのも興味深い。有給分で働いた場合、お金で報酬を得ることもできるが、税金が余計にかかるため、きちんと有給を消化することが一般的であるという。こうした背景から、日本に比べて短い労働時間で、一定の経済効果を生み出すことができているのである。

とは言え、全てが完璧に回っているわけではな

い。ドイツは労働者中心主義であるため、消費者中心主義の日本の感覚からすれば、サービスの質は比べものにならないほど低い。一般的な例をあげれば、労働組合が力を持っているため、公共交通機関はストライキを起こすことも珍しくなく、遅延はもちろん、電車が途中で止まってしまったり、早く出発してしまったりということすらある。また、宅配の時間指定は、午前か午後かのみで、細かい時間指定はできず、この時間帯指定すら守られることは稀である。そのため、不在の場合は、近隣の住民に預けることや、単に玄関先に置いて帰ってしまうことも頻繁にある。家の修理などを頼むにしても、予約時間は大雑把なため、半日休や、職種によっては半日の在宅勤務が認められる。さらに、「私の担当ではないので分かりません」と言われてたらい回しにされることが頻繁にあり、メールで問い合わせても、返信が来ないこともしばしばある。また、急ぎのメールをしても、「休暇中のため1週間後まで返信ができません」との文言が自動返信メールで送られて来ることが多い。日本であれば、担当者が不在であれば同僚が調べて対応することが求められるであろうし、1週間待たされると言われれば憤慨する人も多いであろうが、ドイツでは、お互い様という意識があるため、消費者の側でもそのようなことで腹を立てることはない。その結果、サービスの質は日本と比べてしまうと圧倒的に低くなってしまふ。しかし、皆が妥協しそのような状況を許し合うことで、心に余裕が生まれているように見受けられた。

私自身の経験を述べれば、入寮時に、部屋のクリーニングが終わっていない旨と、（例年のことであろうが）学生が一斉に入寮するため清掃の時

間が足りなかった旨、さらに地価が高騰している中で格安の寮に入れるだけでラッキーだと思ってほしいという旨が書かれた寮の管理組合からの紙が自室に置いてあった。実際に、私が入居した部屋はとても埃っぽく、また前の入居者のものと見られる寝袋が置かれたままの状態だった。その後随時ペンキ塗りやカーペット張り替えを行うことがメールで通知され、不在時には管理用の鍵を用いて土足で侵入され補修された形跡が残っていたこともあった。このようなことから、私自身、ドイツ生活に慣れてくると、期待値が下がり、時間通りや一定の質でサービスが提供されると喜びや感動すら覚え始めたほどであった。

3. ワーク<ライフ・バランス

休暇・余暇の過ごし方においても、ドイツ流の個人主義や合理主義に加え、自然や家族に重きを置くという特徴が見られる。個人主義の例としては、外食をする際の割り勘文化がある。ドイツの外食では1人1皿を頼み、最後の支払では、レストランであっても各自が申し出て自分が飲食した分のみを支払うことが多い。学生の飲み会はキャッシュ・オン・デリバリー方式のバーなどで行われる場合が多く、食事を済ませて行けば、1-2杯のビール(500mlのビール1グラスで3€ほど)のみで終わらせることもできる。外食の際に、お腹が減っていない人が食事を頼まないといったことも容易に受け入れられ、日本のように、皆で同時にいただきますと同じものを食べ始めるような同調圧力もない。さらに独特な文化だと感じたのは、誕生日会である。誕生日には本人が何か振る舞うなどしてお祝いの会を主催する習慣が

ある。幼稚園や小学生であれば、親が焼いたケーキを持って行き、学校で皆に振る舞い歌で祝ってもらう。小学校高学年にもなると、本人の家でお泊り会を開催することもある。日帰りの場合には、本人が親と一緒に、季節に応じてピクニックやレストラン、遊園地などあらゆる楽しめる場所での誕生日会を企画する。大学生は、ホームパーティーのほか、パブなどで誕生日会を行うこともあり、参加者に対して1人1杯の飲み物だけ主催者が奢るという日本では馴染みのないもてなし方もある。大人になると、10年毎の区切りがいい年を盛大に祝うようになり、ホームパーティーを開くことが一般的だという。得意のオープン料理や煮込み料理、冷凍食品を駆使した料理のほか、季節の野菜やフルーツにあまり手を加えず素材の味を生かした料理など、シンプルで他人からの目を気にすることなく自分の好きなように、あくまで気心の知れた仲間と気楽に楽しんでいるように見えた。また、自然や家族に重きを置く例としては、仕事後の過ごし方が挙げられる。例えば、日本では、長い勤務時間の後に仕事場の同僚と飲みに出かけることが頻繁にあるであろうが、ドイツにおいては会社の飲み会は基本的になく、あるとしても歓迎会・送別会くらいで年に数回程度である。さらに、こうした会食には、家族を連れてくるのが一般的で、夏場であれば仕事を少し早めに切り上げ、明るいうちからアスレチック付きのビアガーデンで子供を遊ばせながら、大人はビールを飲み親睦を深めるといった具合である。ビアガーデンでは、飲み物を買えば、食べ物を持ち込むこともでき、ベリー狩りをした親子がタッパーに詰めたベリーを持ち寄って振る舞うようなこともある。

4. 多様性の尊重

各個人が確立された価値観を持ち、自分の時間を大切にする生き方には、この国の教育方針や理念が少なからず影響しているのではないかと思う場面が見られる。ドイツでは各個人の発達度合いや個性に沿った教育が行われている。まず初等教育である基礎学校（Grundschule）に入る前に入学適性検査（Einschulungsuntersuchung）と呼ばれる検査が行われ、ドイツ語力や発達度合いに応じて入学を1年遅らせることもある。さらに、入学後も、習熟度に応じて飛び級および落第は日常的に行われているため、同級生とはいえ年齢差は幅広い。初等教育は基本的に4年⁷だが、それを終えて進む中等教育の道は主に3つある。職業訓練を受ける生徒が進む5年制の基幹学校（Mittelschule, 旧：Hauptschule）、卒業後に職業専門学校への進学を目指す生徒が進む実科学校（Realschule）、大学進学希望者が進む8年制のギムナジウム（Gymnasium）である。大学に進学するためには、ギムナジウム卒業時に全国統一試験（Abitur）を受け、その成績によって入学できる大学と学部が決まる。すなわち、大幅な成績の変動によっては変更も不可能ではないが、学問の道に進むのか専門的な職業訓練を受けるのかという適性の判断が10歳前後で行われることになる。各家庭でも、子供の選択や個性を尊重するという姿勢が見られる。例えば、休日の過ごし方や食べたいものについて、ステイ先の家では子供の希望を聞いて家族皆で決めていく方針であった。また、日本文化を紹介する目的で訪問した森の幼稚園では、各園児が自らがやりたい遊びを選択し、トイレ休憩や水分摂取は各自のペースで行う。誕生日

に振舞われたケーキをお腹が減っていないという理由で食べない子供もいた。こうした個人の希望を尊重する例として、子供が極端な行動を取りたがる場合にも頭ごなしに否定することなく、理由を尋ねて大人と子供と一緒に考えるという姿勢を何度も目にした。

私がドイツにいる間、「こうであるべき」といった理想像を他者から押し付けられることがほとんどなかったように思う。移民を多く受け入れる寛容さを持つドイツでは、自分に害が及ばない限り、他人の振る舞いに干渉しない。ファッションにも無頓着である。家族関係に関しても、両親が離婚と子連れ再婚を経たパッチワークファミリーが多く存在するが、大学で知り合った友人たちは、そうした家庭環境を抵抗なく話す。日本でなされがちな同情などの他者からの評価が必要以上になされないため、本人たちは自己の境遇を素直に受け入れ前向きに捉えているように感じた。

5. 無意識のバイアス

高級日刊紙・Der Tagesspiegelが報じるところによれば⁸、ライプツィヒ大学病院で行われた調査で、ドイツ人女性の声が低くなっていることが判明したという。声の周波数は世界標準で男性が110Hz、女性は220Hzなのに対し、ドイツ人は平均165Hzで話しており、これは体格の変化や環境ホルモンの影響ではなく女性の社会的役割の変化が原因だと推察されている。同研究の中では、女性の高い声が理想的とみなされている日本では、女性の声が世界で最も高いことも明らかにされている。もちろん、ドイツでも完全に男女平等が普及しているわけではないが、各国における男

女格差を測るジェンダー・ギャップ指数（Gender Gap Index：GGI）⁹によると、2017年の総合順位では、144か国中ドイツは12位、日本は114位と、日本に比べるとかなり進んでいることが分かる。私が留学したミュンヘンがあるバイエルン州は、敬虔なキリスト教の多い保守的な地域として知られており、学校が早い時間に終わる子供の世話をするため、パートタイムの仕事をする母親が多い。こうした地域で生まれ育った若者たちが、男女別役割に関わる伝統的な意識を変えて行こうとする現場に立ち会えたような経験があった。大学で出会った友人からホームパーティーに招かれた時、ふと気付くと女性3名のみが皆キッチンに立っており、男性4名がダイニングで談笑している状況になっていた。それに気付いたドイツ人の友人女性は、「これって伝統的な男女別役割のままでと思わない？」と爽やかに男性の参加を呼びかけたのである。彼女のこの発言をきっかけに男女どちらも無意識のバイアスに気づき、若者自身が変化をしたのである。

6. キャリア

労働・休暇・育児の面で、個人主義かつ合理的だが、あたたかみがあり、一定の割り切る気持ちを持つことができれば生きやすい国だという印象を持ったドイツには、あらゆる国籍の人が集まっていた。留学中には多様な人との出会いがあり、大いに刺激を受けたが、中でもドイツで活躍する日本人女性の先輩方には、多く学ぶことがあった。現地でお会いし、インタビューをさせていただくことができた方々は、働き方も家庭の事情も様々であったが、ドイツで心地よく生き抜くための秘

訣として3つの共通点を見出すことができた。それは、チャレンジ精神をはじめとする意思の強さ、環境の変化を柔軟に受け入れる器の大きさ、歴史や芸術など日々の暮らしの中で楽しみを見出す力である。

（1）チャレンジ精神や意思の強さ

労働者中心主義かつ個人主義のドイツでは、日本よりもサービスの質が低いことは前述の通りだが、そのような環境のなかで、特に日本人女性は、ドイツ人女性に比べると小柄で控え目な印象があるらしく、主張をしなければ不利な条件におかれてしまうこともある。ただし、論理的で筋が通った主張ができれば意見は聞き入れられることが多い。こうした背景からか、私の出会ったドイツ在住歴の長い日本人女性たちは、自分の意思をはっきりと論理的に伝えられるだけの十分な語学力と交渉力を持っていた。さらに、在独20年の私の上司は、母国語である日本語に加え、英語とドイツ語が堪能であったが、さらに仕事で求められれば第3外国語を学ぶことすら厭わない姿勢をもっており、ハツとさせられた。異国の地で自ら稼ぎ生き抜いて行くには、これだけの気概とチャレンジ精神が必要なのだろうと感じた。

（2）環境の変化を柔軟に受け入れる器の大きさ

サービスが日本ほど整っていないドイツでは、公共交通機関など想定通りに行かないことが日常茶飯事である。そのため、腹をたてても状況が変わらないことは受け入れ、残された手段で最善を尽くす冷静さと器の大きさを持っていた。さらに、個人主義の強いドイツでは、自分で自分の個性や立ち位置を確立することが重要になる。インタビューをさせていただいた方々は、皆自分のできることや自分にしかできないことを状況に応じ

て最大限に生かし、各コミュニティの中で自らの強みを個性として確立していた。

(3) 歴史や芸術など日々の暮らしの中で楽しみを見出す力

ミュンヘンの街には、歴史ある建造物や町並み、戦争の爪痕、そして長い間磨き上げられた芸術が溢れていた。街では、ユーゲント・シュティール様式の建物が現在も住居として使われている。大学の一角には反ナチ運動を行い処刑された学生たちの記念館があったり、銃弾のあとが残されていたりする。さらに、オペラやコンサートのチケットは、値段の幅が広く、敷居が低い。一番遠い席であれば1,000円前後から楽しむことができるほどである。街中では至る所で路上演奏が行われている。これらは、歴史や文化の知識を得ることで一層楽しめるようになる。ドイツで仕事や育児をされている日本人女性の先輩方は、街や芸術の歴史について積極的に学び、楽しみを見出す工夫をしていた。

7. おわりに

オランダの社会心理学者 Hofstede が開発した6次元モデルの個人主義の項目で、「ドイツはきわめて個人主義的である。叔母や叔父ではなく、親子関係に焦点を当てた小さな家族が最も一般的。周りに左右されず自分の価値観を強く持っている。個人の嗜好に加え、雇用主と従業員の間、契約によって生まれる義務や責任感に基づいて忠誠心を示す。コミュニケーションにおいては、『たとえ相手を傷つけてようと正直に伝えること』が理想とされるため、直接的に行われ、相手に間違いから学ぶ公平な機会を与えようとする。」と分

析されている。こうした特徴は日常のあらゆる場面で垣間見ることができた。

私が7ヶ月のインターンシップと交換留学を通じて実感したことは、ドイツが「個人主義かつ合理的だが、温かみがあり、生きやすい国」であるということであった。個人主義や合理主義という言葉には、他人に無関心で冷酷なイメージがあるかもしれないが、ドイツにおける個人主義はそれとは違っている。個性や個人の意見を尊重し各個人が自立的でありながら、自然や家族との共生に重きを置いた、思いやりのある温かみと共存したものである。ドイツ語には“Gemütlichkeit”という言葉がある。日本語1語に丁度当てはまる表現はなく、意味としては、あたたかい雰囲気や、フレンドリーであること、居心地のよさや幸せな気持ちといったニュアンスを含む。この言葉は日常のあらゆるところで使われ、また大切にされている価値観である。

「世界の人々が穏やかに豊かな心で暮らせる国際社会形成に貢献する国際的な会計の専門家」という将来像のもと、私は来春より日本でファーストキャリアを歩み始めるが、ドイツ人やドイツで活躍する日本人女性の先輩方から学んだことを生かして、心地よい生き方ができるよう心がけていきたい。

註

- 1 トビタテ！留学Japan日本代表生（大学生等の第1-7期）は累計3,048名、うち女性51%である（https://www.tobitate.mext.go.jp/assets/pdf/tobitate_%20overview_and_interview.pdf）。
- 2 学生のうち女性が35%、留学生が29%を占める。（<https://www.tum.de/en/about-tum/our-university/facts-and-figures/>）
- 3 2016年の名目GDPはアメリカドル換算で、日本が4,950（10億US\$）で3位、ドイツが3,496（10億US\$）で4位。（IMF-World Economic Outlook Database）
- 4 オランダの社会心理学者Hofstedeは、職場における行動に最も強く影響を及ぼす要素を抽出することを目的として、米IBMの世界40カ国11万人の社員を対象に行動様式と価値観に関する研究を行い、1980年に4次元モデルを開発し、その後別の研究での改良を加え、6次元モデルが構築された。6次元モデルでは、(1)権力格差の大小、(2)個人主義（対集団主義）、(3)男性らしさ（対女性らしさ）、(4)不確実性の回避の強弱、(5)長期指向（対短期指向）、(6)快楽的（対禁欲的）の6指標を基に、国々を比較して相対的な特徴を捉える。
- 5 一人当たり平均年間総実労働時間（就業者）は日本で1,713時間にに対し、ドイツは1,363時間と短いが、一人当たりの名目国内総生産（GDP）は（USドル換算、1,000ドル）日本で39.0に対しドイツは42.2と多い。データはいずれも2016年。（<https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/databook/2018/documents/Databook2018.pdf>）
- 6 ドイツでは夜に手のこんだ料理はせず、冷たい食事（Kaltes Essen：パンにチーズやソーセージ、ハムなどを挟んだり載せたりするセルフメイク式のサンドイッチのような冷たい食べ物）が伝統的な夕食となっている。これには、準備や後片付けが簡単でキッチンを綺麗に保つことができる他、家族との時間をゆっくりと取れるという効果や、早寝早起きの人が多いため胃に負担が少なく睡眠の質が上がるなどのメリットがある。
- 7 <http://www.newsdigest.de/newsde/news/featured/6085-980/>
- 8 <https://www.tagesspiegel.de/wissen/neue-studie-die-weibliche-stimme-ist-tiefer-geworden/20813946.html>
- 9 世界経済フォーラム（World Economic Forum）が

2017年11月に発表した「The Global Gender Gap Report 2017」より。（http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2017.pdf）本指数は、経済、教育、保健、政治の4つの分野のデータから作成され、0が完全不平等、1が完全平等を意味している。最新（2017）のデータ（144か国中）では、ドイツの総合指数:0.778(12位){経済0.720(43位)、教育0.970(98位)、保健0.975(70位)、政治0.447(10位)}、日本の総合指数:0.657(114位){経済0.580(114位)、教育0.991(74位)、保健0.980(1位)、政治0.078(123位)}となっている。

参考文献

- Albert, M., 1991, *Capitalisme Contre Capitalisme*, Paris, L'Histoire immédiate. (=1996, 小池はるひ訳『資本主義対資本主義』竹内書店新社)
- Dore, R., 2000, *Stock Market Capitalism: Welfare Capitalism: Japan and Germany versus the Anglo-Saxons*, Oxford, Oxford University Press. (=2001, 藤井真人訳『日本型資本主義と市場主義の衝突一日・独対アングロサクソン』東洋経済新報社)
- Hofstede, G., Hofstede, G. J., Michael M., *Cultures and Organizations: Software of the Mind, Third Edition*. (=2013, 岩井八郎・岩井紀子訳『多文化世界—違いを学び未来への道を探る—【原書第3版】』有斐閣)
- Sandberg S., 2013, *Lean in: Women, Work, and the Will to Lead*, New York, Alfred A. Knopf. (=2013, 村井章子訳『リーン・イン：女性、仕事、リーダーへの意欲』日本経済新聞出版社.)
- Zugehör, R., 2003, *Die Zukunft des rheinischen Kapitalismus: Unternehmen zwischen Kapitalmarkt und Mitbestimmung*, VS Verlag für Sozialwissenschaften, Köln, VS Verlag. (=2008, 風間信隆監訳『ライン型資本主義の将来—資本市場・共同決定・企業統治』文眞堂)
- 柏木恭典, 2010, 「ドイツ語圏における家族と離婚の周辺の課題」『千葉経済大学短期大学部 研究紀要』第6号 pp.85-94.
- 北村敬子編著, 2018『会計研究者として活躍する女性たち：輝ける未来へ向けて』中央経済社.
- 熊谷徹, 2016,『ドイツ人はなぜ、1年に150日休んでも仕事が回るのか』青春出版社.
- 労働政策研究・研修機構, 2018,『データブック国際労働比較2018』.